2. シナイア

ブクレシュティ北駅

11月17日も薄曇りの穏やかな朝だった。この日の目的地、シナイアはブクレシュティの北約120キロの街で、一昨日ブダペストから列車で辿ったルートを逆に行く。午前中の列車は6便あったが、早く着きすぎてもチェックインできないと困るので、11時10分発の列車で行くことにした。

オーナーがタクシーを呼んでも良いし、宿の車で送れば駅まで30lei(651円)だと云う。ルーマニアにはまだ慣れていないのでこれを利用することにした。タクシー料金に比べると3倍くらいだったようだが、最初から提示されていたし絶対額にしてみれば大したことがない。充分余裕をみて10時40分に宿の車に乗り込みブクレシュティ北駅へと向かった。

ところが駅が近くなって、GPSを部屋の窓際に置き忘れたことに気付いた。さほど高価な機器ではないし、再泊するからその時回収できるとも思う。しかしこれまでの旅で一日の軌跡を宿に戻ってから辿れる面白さを実感していたので、GPSの使用を継続しようと、宿へ一旦引き返すことにした。

しかしこれは全く馬鹿げた勘違いで、実のところGPSはカメラバッグに設えた専用ポケットに収納され車のトランク内にあった。ジュールでアーミーナイフをなくしたと思い込んだのと同じパターンだ。年々呆けが増して行くようで哀しい。ともかくブクレシュティ北駅に着いて料金とは別に10lei(217円)をチップとして運転してくれたボーイに渡す。

このつまらない失敗により、切符を買う時間はほとんど残されていない。しかし視界に切符売り場はなく、それを示す案内表示も見当たらなかった。ともかくもう少し藻掻いてみようと、コンコースを小走りで探し回る。するとなぜか親切なオヤジ(客待ちタクシー運転手？)が現れ、切符売り場を教えてくれた。シナイアまで121キロの2等切符は38.1lei(826円)だ。切符を買い終わってみると、彼はまだ傍らで待っていて、さらに乗り場まで案内してくれる。乗り場は発券窓口で聞いていたので判っていたが、ともかく親切だ。

乗り込もうとすると、別のオヤジがカバンをデッキに持ち上げてくれて、さらに車内まで運び込む。これはさすがに単なる親切とは思わなかったが客引きなどと違い、行く先が車内ならば高がしれていると彼のあとを追った。切符の座席番号を確かめ席に落ち着くと、彼は身分証明書を示し、孤児に対する寄付を求めてきた。ルーマニア語の身分証明書の内容を確かめようもないし、胡散臭いので拒否。

彼が去ったところで、前の座席にいた東洋系女の子から、「この車輌は追加料金が必要か？」訊かれる。自分の切符の内容が良く判っていないので、確言もできないが、ともかく二等車輌で車両番号が2を指定されているものと見なしそれに乗った。なので、「私も初めてで良く判らないが、この切符で(と示し)追加料金はないと思う。」と答えた。

乗車切符(実寸大)。

2等列車車内。

彼女の切符も同じ種類のものだったようだ。ついでにどこから来たか訊かれたので日本と答え、訊き返してみたら韓国だった。列車が走り始め間もなく、彼女は編み物を始めた。手つきはたどたどしいのに、外国に来てまでやるのは、例えば恋人へのクリスマスプレゼントなど、締め切りのある仕事なのだろう。

天気、窓ガラスの状態ともに比較的良好だったが、景観はつまらないものだった。1時間40分弱の乗車で、定刻にシナイアへ着く。ハンガリー同様に運航は正確なようだ。

工事中の道路。右手に小さく見えるユーロ旗がホテルの裏口。

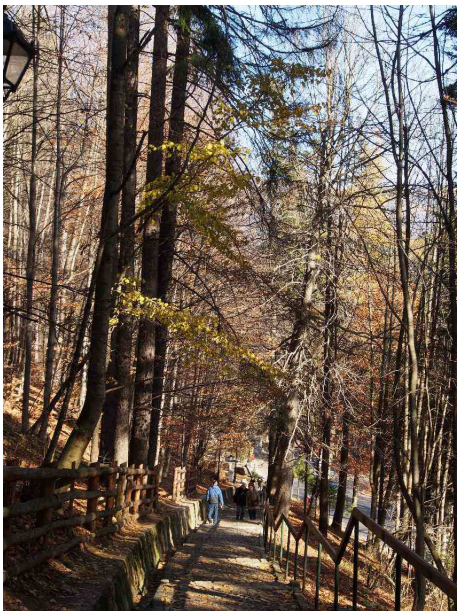
ホテル カライマンとシナイア修道院

韓国女性の下車駅もシナイアだったけれど、荷物がごく僅かなので日帰りらしい。身軽なだけにすぐ姿を消したが、こちらはそんなわけに行かない。駅前を通る相互一車線の街道を渡ると、標高差40メートルほどの崖に刻まれた階段を、キャリーカートにカバンを着けたまま引っ張り上げる。上にも車道があり、こちらの交通量はごく少なかったものの管工事のため深さ1メートルほどの溝が掘られて渡ることができない。荷物がなく若いときであれば飛び越したかもしれないが、二重苦状態では諦めるしかない。

日本であれば通行人のために50メートル程度の間隔で仮設の橋を用意するものだが、こちらではそんな斟酌はしないらしい。目の前にホテルの裏口がありながら、仕方なく溝に沿って100メートルほど渡れそうな場所を探す羽目になった。

宿に辿り着くまでに散々な思いをしたが、何とか裏口に辿り着くと後は順調だった。1881年に築造された建物は、今となっては古びた印象も与えるが、かつて高級リゾートホテルであったことを偲ばせる風格にも満ちている。フロントにいたのは小柄で感じの良いオバサンだった。予約は簡単に確認できたので、部屋を下見させて貰う。

用意されていた部屋は3階にあり、ホテルの庭同様になっている公園を見下ろすダブルルームだった。ちなみに公園はこの部屋から見下ろすエリアで7,500坪あり、中央には噴水を備えた円池もある。この時期なので水は止まっていたのは生憎だったが、ともかく満足してフロントへ戻った。



修道院への遊歩道を振り返る。

チェックインを済ませ、Wi-Fiが使用できることを確認し、部屋へ荷物を運んだ。動きは遅いもののエレベーターが備えられている。部屋に荷物を収めると、すぐに出かけた。この日は土曜日だったが、先ほどフロントでシナイア修道院について訊いたところ、「日曜日は非公開だ。」と云われたためだ。

公園を南西方向へ横切り、車道を渡ると斜面を登る幅2メートルほどの遊歩道がある。土曜日の午後で天候にも恵まれたせいか、混雑と云うほどではないけれど登る人、下る人が三々五々途切れることがない。下の公園から20分ほどで修道院の入口に辿り着いた。

右手に位置するのが1846年に建設されたもので大教会(ビセリカ・マーレ:Biserica Mare)だ。ブクレシュティで見た教会と共通する煉瓦と漆喰の使い方や、塔や壁の武骨で直線的感じはブルンコヴェアヌ様式ということだろうか。しかしブルガリアの古い教会建築でも似たものを見かけたから,東欧正教様式とでも云った方が良いのかもしれない。

左手に位置するのが元々あった教会とそれを囲む修道院で大教会に較べると地味だけれど瀟洒な感じは好ましい。しばらく二つの教会を敷地の外を巡って眺めた。

上:シナイア修道院の大教会。中、下:大教会のフレスコ画。

一回りしてから門を入り、そこで入場料の4lei(87円)を支払う。大教会の方から見ることにした。フレスコ画が保存状態も良いし、晴天なのでドームや壁に設けられた窓から降り注ぐ明かりで見易かった。数人の観光客はいたものの、祈りを捧げる人はいないので寛いで撮影しながら鑑賞する。

大教会のイコノスタシス。

古教会のフレスコ画。

古教会のあるエリアへの通路

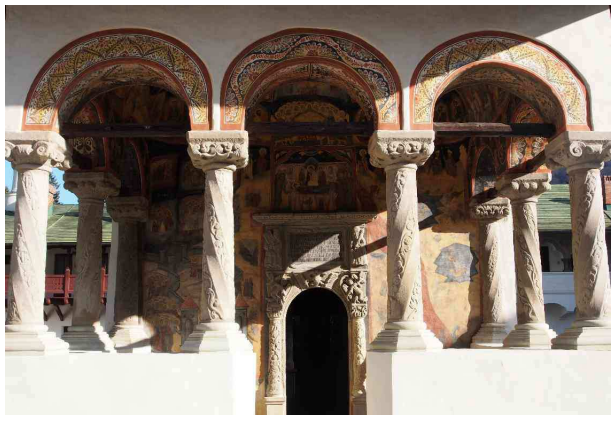
大教会は一巡すると、「もう充分。」の感じで、古教会（ビセリカ・ヴェケ：Biserica Veche）の方へ移動した。こちらは1695年にイスラエルを巡礼したルーマニア貴族が帰国後に建てた修道院と教会だ。修道院はシナイア山（シナイ半島にある、モーセが神から十戒を授かったとされる場所）に因んで名付けられ、それが街の名にもなった。

最初に見たときから感じていたことだが、近付いてみると質素だけれども風雅な佇まいが際だつ。フレスコ画は修復されたものかもしれないが、非常に鮮明で質的にも大教会のものより勝るように思えた。

対称的がひときわ強く感じられたのはイコノスタシスで、こちらの簡素なものが、あちらの華麗で豪華なものより、祈りの対象として相応しいと感じたのは、無信仰者の勘違いだろうか。

古教会のイコノスタシス。

古教会が地味なためか、はたまた単なる偶然か、他の観光客が訪れることもない。清浄の地を独占して時を過ごした、堪能した気分になり帰ることにした。去り際に大教会の外観を再び数枚撮影し、シナイア修道院を出る。



古教会のナルテクス。

カロル1世

原名はカール・アイテル・フリードリヒ・ゼフィリヌス・ルートヴィヒ。ルーマニア公（1866年～1881年）から初代ルーマニア国王（1881年～1914年）。ドイツ系の貴族だったが、縁戚関係からナポレオン3世と良い関係にあった。19世紀中頃のルーマニアではフランス留学経験者が政治力を持っていたので、公国の後継者選出に苦慮していた同国で、ナポレオン3世の推薦によりルーマニア公となる。

支配者不在が大問題であったので、彼の登場は群衆に歓迎された。彼の即位後間もなく、議会は同国における最初の憲法を採択した。当時としては革新的内容で、ルーマニアの近代化と発展に大きく寄与した。

当時のルーマニアはヨーロッパ諸国の承認を得て成立した合同公国だったが、1877年に独立宣言し実質的王国となり、その後1881年にカールは国王カロル1世として戴冠した。

在任期間は48年間に及び、同国の威信を高め経済を立て直すなどの功績があった。

ちなみにネット検索で得られた情報で不可解に思うのは、憲法で、「カロル1世の後継者は東方正教会信徒。」と定めるほどなのに、カロル自身はカトリック教徒だったことや、同じく憲法に、「国王がルーマニア人女性と結婚することは許されなかった。」とあることなどだが、今のところこれ以上調べることができずにいる。

ホテル・カライマンの内部。上左：3階のエレベーターホール。上右：3階から中空き階段の吹き抜けを見下ろす。下左：宿泊した部屋。下右：廊下も広々し、椅子机などが置かれ古式を感じさせる。

一旦宿へ戻り、古き良きヨーロッパを偲ばせる建物の共用部分と寝室を観察しつつ撮影した。日本旅館にも云えることだけれど、時の醸す味わいや風格は時間の経過のみによって可能になると改めて実感した。最後にトイレを使い、街並み見物を兼ね遅い昼食に出かけた。

正面から見るホテル カライマン。白壁部分が2、3、4階。泊まったのは3階で噴水のすぐ左側2番目に見える窓の部屋。

実のところシナイアには街並みと云うほどのものはない。町を貫く幹線道路の駅付近部分から南へ1キロ弱の沿道に飲食店や宿泊施設が軒を並べ、疎らに商店などが存在するだけだった。野良犬が多い。皆気立ては良さそうだが人間を恐れるところがある。結構邪険に扱われているのだろう。しかしどの子も毛並みはそこそこ綺麗だった。

アイリッシュハウスの手前で見かけたワンコ。野良犬らしいが毛並みは綺麗で、どこか憂愁を帯びた顔が良かった。

一応目指したのはアイリッシュハウスで英ガイドのお奨めだった。英ガイドの地図を頼りに簡単に見付かった。幹線道路から10メートルほど引っ込んだところにある、3階建ての木造家屋で宿泊施設も兼ねているらしい。1階にある食堂へ入ると、土曜の午後のためかほぼ満席だ。

席が空くのを待ってまで食事をする気は無かったが、一応従業員の反応を確かめようとしばし佇んだ。三人ほどウェイトレスがいたようだが、驚いたことに間近を通っても声を掛けないどころか視線さえ向けようとしない。混雑時に訪れた一人客など文字通り洟も引っ掛けないの態度だ。即この店で食事するのは止めにした。日本でも観光地などで繁忙期は客をぞんざいに扱うが、此処ほど酷いところはかつて経験がない。

上：観光地でよく見かける蒸気機関車型自動車牽引観光車輌。動いていなかったので、営業中か否かは不明。
下：市場。

この辺りの食堂に入る気持ちはほとんどなくなっていたが、町外れまで一応見届けようと前進を続けた。しかしそれも5分ほどで家並みが途切れたので終わりになる。

観光案内所があったので、市街平面図を貰い、スーパーマーケットの所在を訊く。「スーパーはないけれど．．．．」ということで、それに替わるような所を2箇所教えてくれた。一つ目は市場で倉庫を思わせるような建物内に商品台が並び、個人業者が野菜類を商っている。空いている台も目立ったが、野菜以外も商うのかは不明だ。二階部分には衣料品を扱う店が二軒ほどあったが、どちらにも用はなかった。

二つ目の方は万屋風だが一応スーパーマーケットと云ってもおかしくない。ここでミネラルウォーター2㍑2.75lei(60円)、ハム3.26lei(71円)、ミルク1㍑4.95lei(107円)、ロールパン0.8lei(17円)、ヨーグルト125㌘2箇パック2種2.9lei(63円)、ヨーグルト140㌘2種2.3lei(50円)など購入。

宿へ向かって歩いているうちに、「ホテルのレストラン利用もありか。」の考えが浮かぶ。かつては海外旅行中に利用することも多かったが、個性あるいは郷土性と云ったものに欠けるようで遠ざかってしまった。しかし今日昼飯を抜きにしてまで頑張らなければならないような縛りではなく、単に失念していただけだ。

宿の食堂は2階部分にあり、70室という宿の規模に見合った大食堂だ。テラス席もあるが、11月の下旬でかつ標高850メートルのシナイアでは閉まっていた。時刻は既に3時半だったのに半分以上の席が埋まっていた。オフシーズンであり、一般観光客の足が向かないはずの此処が土曜日の午後とはいえこれほど混むのは、何かイベントでもあったのだろうか。ちなみにシナイアは避暑とウィンタースポーツが集客源だ。

英語と2カ国語併記のお品書きを持ってきたウェイトレスは特に愛想が良いわけではないがまともで、アイリッシュハウスのようなことはない。ミックスサラダと鶏のレバーのグリルに付け合わせとして茸のソテーにして、ハウスワインの赤をグラスで貰った。

ワインはすぐにもたらされたが、サラダが出て来るまで20分もかかったのは混んでいたせいだろうか。レバーはさらに8分かかった。レバーや茸は好きな素材だけれど、料理としては甘く評価しても平均点だろう。しかし美

上：ミックスサラダ。下：鶏のレバーと茸のソテー。

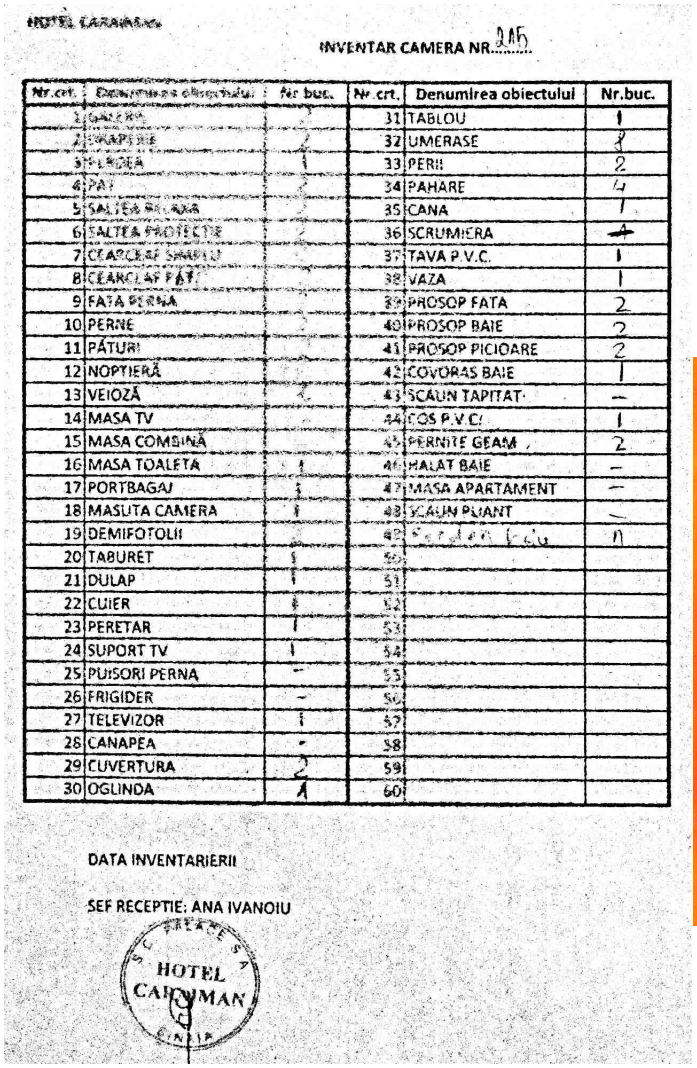
ケーキカットをしている婦人を祝福するパーティーが隣のテーブルで行われた。

食家でない以上に、大抵のものは美味いと食べられ酒が気持ち良く飲めればいいから、この日の遅い昼食もそれなりに楽しむことができた。

隣のテーブルでは10人ほどの中高年男女がそれなりに着飾って飲みながら談笑していた。そのうちデコレーションケーキが運ばれてきたので、何らかの祝賀会らしい。

70くらいの婦人が皆に囲まれてナイフを手にした。このことからすると彼女の誕生祝いなどだろうか。日本だと古稀や喜寿、傘寿などもう少し節目となる祝い事があるけれど、ルーマニアだとどうなのだろう。興味はあったものの不躾に訊くわけにはゆかず、さらには英語力の問題もあり疑問のままだ。

1時間ほどで食事を終え、現金で支払いをした。鶏レバーのグリル6.5lei(141円)、茸のソテー9lei(195円)、ミックスサラダ5.5lei(119円)、自家製パン1lei(22円)、ワイン400cc7.2lei(156円)など。



INVENTAR CAMERA NR. 215

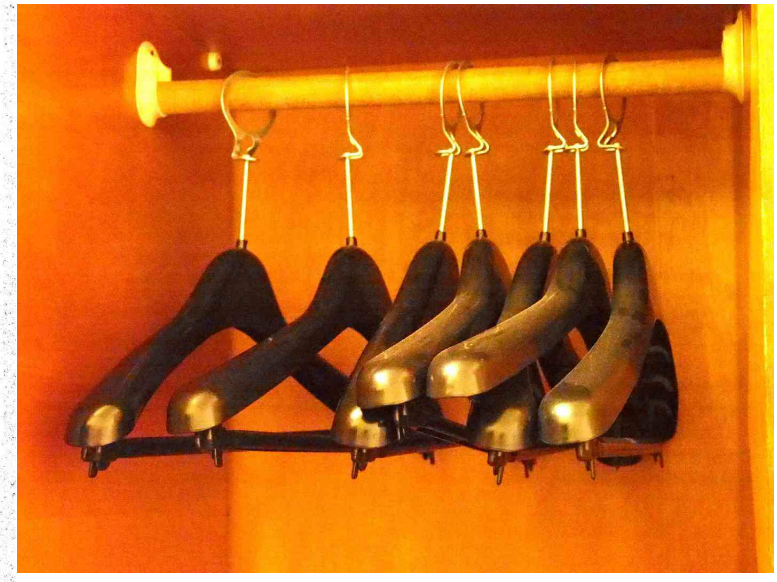
Nr.crt.	Denumirea obiectului	Nr.buc.	Nr.crt.	Denumirea obiectului	Nr.buc.
1	GARDA	[illegible]	31	TABLOU	1
2	CHAPSIE	[illegible]	32	UMERASE	8
3	PERDEA	1	33	PERII	2
4	PAT	[illegible]	34	PAHARE	4
5	SALTEA PRINCIPALA	[illegible]	35	CANA	1
6	SALTEA PROTECTIE	[illegible]	36	SCRUMIERA	4
7	CEARCEAF SAMBLU	[illegible]	37	TAVA P.V.C.	1
8	CEARCEAF PAT	[illegible]	38	VAZA	1
9	FATA PERNA	[illegible]	39	PROSOP FATA	2
10	PERNE	[illegible]	40	PROSOP BAIE	2
11	PĂTURI	[illegible]	41	PROSOP PICIOARE	2
12	NOPTIERĂ	[illegible]	42	COVORAS BAIE	1
13	VEIOZĂ	2	43	SCAUN TAPITAT	—
14	MASA TV	[illegible]	44	COS P.V.C.	1
15	MASA COMBINA	[illegible]	45	PERNITE GEAM	2
16	MASA TOALETA	1	46	HALAT BAIE	—
17	PORTBAGAJ	1	47	MASA APARTAMENT	—
18	MASUTA CAMERA	1	48	SCAUN PLIANT	—
19	DEMIFOTOLII	[illegible]	49	[illegible]	1
20	TABURET	1	50		
21	DULAP	1	51		
22	CUIER	1	52		
23	PERETAR	1	53		
24	SUPORT TV	1	54		
25	PUFSORI PERNA	—	55		
26	FRIGIDER	—	56		
27	TELEVIZOR	1	57		
28	CANAPEA	—	58		
29	CUVERTURA	2	59		
30	OGLINDA	1	60		

DATA INVENTARIERII

SEF RECEPTIE: ANA IVANOIU

HOTEL CARPATIAN

部屋の説明書ファイルに綴じられていた備品リスト。右列の鮮明な部分を読んでグーグル翻訳してみると、tablou(絵)、umerase(ハンガー)、perii(ブラシ)、pahare(グラス)、cana(栓)など。こんなリストを見たのは初めてだ。



左のリストだと8箇あるはずのハンガーが7箇しかない。しかも埃をかぶっている。ホテルのハンガーが埃をかぶっているのを見るのも初めてだ。

朝食風景。

ペレシュ城への途中で出会った野良犬。おとなしいが警戒心が強いようだ。

ペレシュ城とペリショール城

17日の夕方、室温は20℃で翌朝も同じだった。サッシなどは旧来のものだが二重だし、壁厚が充分なので保温性が良いのだろう。夜中にすぐ隣に位置する旧式なエレベーターの作動音が大きいことに気付く。予め判っていれば他の部屋を希望したはずだが、部屋下見の際にそこまで気付くのは難しかった。

4時半頃汽笛一声。インターネットの時刻表で調べると4時32分発、ブクレシュティ着6時10分と、4時47分発、6時27分着がある。早朝になぜこんなに便があるのか良く判らないが、列車はその後も12時までに6便もあった。

7時40分に朝食へ降りると、既に多数が食事中で、その後も続々現れる。互いに挨拶もしないからグループではないらしい。そう思っていたが朝食後に正面玄関前に出てみると十数人がガヤガヤやっている。やはり団体さんなのか。

天気は昨日と打って変わり、どんよりした雲が立ち籠めている。一応ペレシュ城とペリショール城を見に行くつもりだが、それほど見物に時間は要さないだろうし、他に行く当てもなかったので部屋でぐずぐず過ごした。天候の回復も見込めないと見切りを付けた10時半になって宿を出る。

地図を見るとカロル通りから別れ、ペレス渓流に沿って行くのが順路かと思われた。後で判ったのは、距離的には大差ないが、一般的に観光客が辿るのはシナイア修道院経由の道らしい。しかし勘違いのお陰で森林の中をせせらぎを聞きながら行くことができた。気温は3度で陽射しもないけれど、風がなかったせいかそれとも坂道を登ったためか、カッターシャツに防寒コートだけで寒さを感じない。

前方にペレシュ城が見え始めた辺りで、左手から合流した道から次々観光客が姿を現し、「裏道」を辿ってきたことにようやく気付く。土産物を商う屋台も並び、俄然観光地的な雰囲気に変わった。

この城は様式的に云えばドイツ・ルネサンスにゴシックを加えたものらしい。要するに時代は替わっていたから様式的統一よりも、審美的な観点で決まったのだろう。

ペレシュ城。

庭の彫像類にも随分注力したようだ。

彫像のそばに、「彫像に登るな」の立て札。ルーマニア人は制札がないと登ってしまうのだろうか？

この時期に作られた類似の城としてすぐ思い浮かぶのがノイシュヴァンシュタイン城だ。しかし中世騎士道への夢想的憧れを具現しようとしたルートヴィヒは、グランドデザインの舞台美術の専門家に任せるなど、要するに居住することを軽視した非実用的な城だったらしい。

これに対し現実的だったカロルは政治や外交の場として使用できるように作ったようだ。つまりは交渉相手に快適さを感じて貰うと共に、「これだけ素晴らしいものを作った人。」と畏敬の念を植え付けるような仕掛けだろう。

「すべて王室の自己財産を投じて建設された、この宮殿の建設総額は、およそ1600万ルーマニアレイ(現在の120億円程度)。」との情報が複数あるものの真偽のほどは未確認。ともかく城の内部は一見の価値以上があったと思われるのに、10月30日から11月30日まで、保全工事のため内部公開は中止されていた。

ANUNȚ

ÎN PERIOADA 30 OCTOMBRIE – 30 NOIEMBRIE 2012

CASTELUL PELEȘ ESTE ÎNCHIS

PENTRU LUCRĂRI DE CONSERVARE PREVENTIVĂ

VĂ INVITĂM SĂ VIZITAȚI CASTELUL PELIȘOR

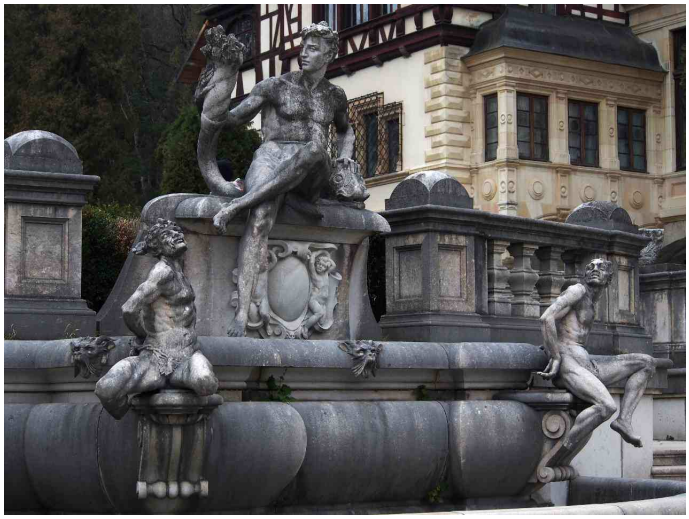
ȘI

EXPOZIȚIA TEMPORARĂ

GUSTAV KLIMT ȘI KÜNSTLERKOMPANIE

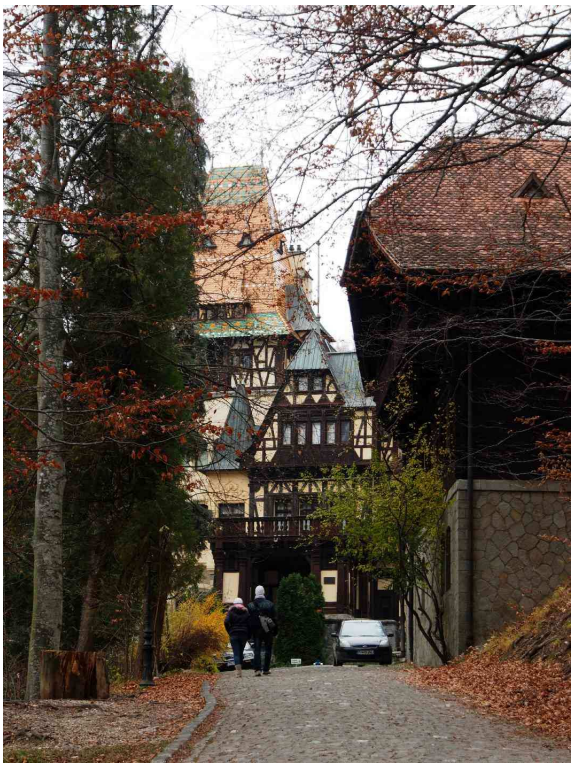
上：入場料金表。レセプションエリアだけ巡るスタンダードツアーが45分で大人20lei(434円)、プライベート部分も見るオプショナル1が1時間15分で50lei(1,084円)、総てを巡るオプショナル2が2時間で70lei(1,518円)。写真撮影32lei(694円)、ムービー53lei(1,149円)。
下：保全工事のため公開中止の貼り紙。

基本的にガイドツアーは嫌いだし、宮殿建築の金の力で人々をひれ伏させるような意匠も好まないから、その意味で残念さはそれほどでもなかった。内部に較べれば大したことはないのかもしれないが、良く整備された庭園巡りを楽しむ。



力作だが噴水が止められているといささか間が抜ける。

途中でルーマニア人らしい若いカップル二組のグループに記念写真の撮影を頼まれた。フィルムカメラであれば、引き受けた責任上、正常に写っていたか戦々恐々たる気分になるが、デジタルだと結果を彼等に確認して貰えるので気楽なものだ。今回も一度でOKが貰えた。



ペレシュ城からペリショール城への石畳道。

庭園は良質なものだけれど何しろ規模が小さく、短時間で一廻りするとそれ以上繰り返し鑑賞する気にもならない。ペレシュ城に隣接するペリショール城へ移動した。

ペリショール城。

この城はカロルが彼の後継者であり甥のフェルディナンド夫婦のために建設した。フェルディナンドの妻マリーがペレシュ城に住むのを嫌ったためという。ペレシュ城が公式的使用も考えて作られたのに対し、ペリショール城は夫婦の私邸的なものだったので、規模もだいぶ小さい。しかしドイツ中世様式の外観を持った建物は瀟洒な佇まいで、ペレシュ城よりも好ましく感じられた。

内装はマリーの主導で進められたらしい。これはペレシュ城が王妃エリザベータの主導によることを考えれば特筆すべきことではないかもしれないが、マリーは多才でかつ優れた能力の持ち主で、例えば第一次大戦後のヴェルサイユ講和会議で、ルーマニア語を話す住民のいる地域を統合する「大ルーマニア」を主張し、その結果ルーマニアは戦前よりも国土を4割も増やすことに成功したという。内装に関しても非凡で、当時としては革新的なアールヌーヴォーを基調とし、さらにビザンチン様式や出自にかかわるケルト要素を加えたもののようだ。

しかしこの内部の見物は気分的に盛り上がらず、入場券売り場まで行ったものの見ないまま踵を返してしまった。

日曜日の昼時だったので、オフシーズンの11月にもかかわらず観光客の姿が多い。ざっと見た感じでは四分六で外国人よりルーマニア人が多そうだ。飲食店も賑わっていた。城を眺めるテラス席での食事はかなり気を惹かれるものだったが、昨日のアイリッシュハウスで、「この街は観光客をまともに遇さないところだ。」の思いが強く刷り込まれてしまったせいか、結局どこにも立ち寄らないまま僧院の方へ下った。

ペレシュ城とペリショール城へのアプローチが合流する辺りにあるホテル・エコノマット。城の一部かと思わせるような作りは魅力的だった。

シナイア僧院から城へ通じる道路は一般車両の進入を禁止し遊歩道になっている。城へ向かう観光客はほとんどがこの道を行くため、沿道には土産物屋などの屋台が軒を並べていた。

シナイア僧院は昨日の情報通り門を閉ざしていた。一応塀越しに7枚ほど撮影。そこから下る遊歩道は既に二回歩いているので適当に違う道を選んだ。方向音痴でも、「坂を下って行けば良い。」ことと、ホテル・カライマンがランドマークとして非常に目立つので迷いようもなかった。

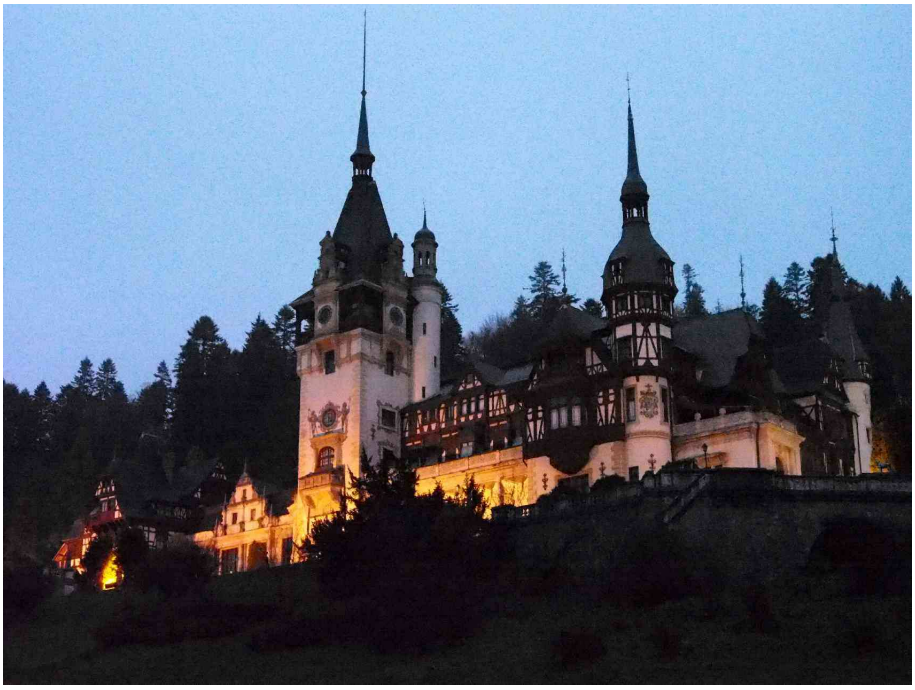
部屋に戻ったのは12時半だった。食欲が今ひとつだったことと、階段を登って垣間見た食堂の混雑から、1時間ほど部屋であれこれやってから食堂へ降りた。半分ぐらいのテーブルに人がいる。窓際の席を選んで坐った。

昨日と同じ英文併記お品書きからミックスサラダと豚のグリル、付け合わせに各種茹で野菜を選ぶ。通常のお品書きならば付け合わせを含んだ一項目になっているが、此処はなぜか別だった。理屈からすればその方が客にとって選択肢が多くなるので望ましいのかもしれない。ワインは赤をグラスで貰った。

上：ミックスサラダ。昨日と同じお品書きを注文したが、若干異なっていた。
下：豚のグリルと各種茹で野菜。

ワインとサラダは大して待たされずに、豚のグリルも10分遅れだったので、海外のレストランとしては早い方だった。しかしサラダはともかく、グリルの方は不味いまでゆかないにしても、もう一度注文することはない程度の代物だった。それでもこれを肴に酒さえ飲めれば不満は感じない。3杯のワインを飲み干す。

勘定は豚のグリル12lei(260円)、茹で野菜5lei(108円)、サラダ5.5lei(119円)、自家製パン1lei(22円)、ワイン600cc10.8lei(234円)の合計34.3lei(744円)は格安か。40lei(868円)支払い釣りをテーブルに残す。



ペレシュ城、4時53分。

部屋で一眠りしてから4時半頃散歩に出かける。シナイア僧院の脇を通り、ペレシュ城を見上げる辺りまで行った。城の公開時間は4時までなので、観光客の姿はほとんどなく、土産物屋台を閉めて帰るらしい人が時々下ってくる。

ライトアップされたペレシュ城を7枚ほど撮影して踵を返した。とっぷり暮れ街灯は疎らだが、歩くに不自由はせず不穏な雰囲気もない。